

第四席 一念と後念

一念と
後念

一 一念とは墮ちる機がお助けにあうて南無になる、其のお助けは受持つお助け、引受けるお助け、受取るお助け。至心信樂己れ忘れてといふのはどこに出て来るか、困つて居る所の墮ちる機を受持つて貫ふから、己れ忘れてたより力になることになる。それをたのむに骨折るのは大間違ひ。たのむことに心配は要らぬ、參れんとなつたら受持つ、行けんとなつたら引受ける、それをへ聞いたら己れ忘れて後生助けたまへと出て來んならん所だ。南無といふは衆生が阿彌陀如來に向

ひ奉りて雑行すて、後生たすけたまへどたのむ、衆生とは墮ちる機、阿彌陀如来とは墮さんお慈悲、信心の仲人は要らぬ、たのむの仲人も要らぬ、ぢかづけで向ひあつて見よ、たのまねば居れん事になる。その所をよく聞かんならん。

お前さん達でいふなら、後生に詮じつまつた機を宿善の機といふ、後生大事の機は、參らせて下さると夜明けもし、助けて下さると疑ひも晴れ、命終つても此の儘御浄土に疑ひは無いが、さて愈となるど、何にもこつちには無い眞闇がりぢやらう、たゞはわかたが眞つ闇がりをどうしませう、どうすることも無い、參る心配は俺が受持つ、助かる世話と墮ちんの世話は俺が受持つ、たゞか、たゞ、信心は要らんか、要らん、疑はれる、それも要らん、生れついたる生地まぢの儘、ありべがりの其のまん、墮ちる實機の其のまんま、これではもういやといへまゝい。安心出来ぬ、そこ受持つ、確かになれん、そこ引受ける、これでもまだ具合が悪いか。たゞか、たゞ、そなたの方に出し物が要る事なら、五劫永劫の心配はし

信心は
要らん

ない。そこで南無が出て來んならん。墮ちる機と墮さん親と差向ひ、參れるとなれん、そこ受持つ、助かるとなれん、そこ受持つ、ハア、こんな所を受持つ親があつたか、と彌陀に向ふ。

彌陀に
向ふ本元

これには大體本元がある、それが三返轉じて居るからたゞでは解らぬ、今の讚題の言葉では、

かゝる機までもたすけたまへるほどけは、阿彌陀如来ばかりなりとしりて。ハア、こんな機を受持つのか、と驚いた所。今迄は、信じて、夜明けして、たのんで、安心して、仰山道具が要つた、辨慶は七つだが、十五通り位ある。今度は道具は無い。今夜でも行かんならんといふ後生となつたら、道具は何にもならん、萬善萬行も役には立たん。疑晴れるも役には立たん、阿彌陀様御一佛になつたも役には立たん。サアとなつたら方角なしの眞闇がり、これより外はございません、どうしやう、と行け。

二 之は私が言ふ迄もない、お前さんやう聞く所だ、八十通のお文を讀むと、

それ五劫思惟の本願といふも、兆載永劫の修行といふも、たゞ我等一切衆生を、あながちにたすけ給はんがための方便に、阿彌陀如来御身勞ありて。

とあらう、讀んだ事は無いか、五帖目様ぢやが、讀んだ事は無いやうな顔をしてるわい……。五劫といふは私の機を選び取つた間、法藏の四選擇といつて其の中に機的選擇がある、機を選ぶのに善い方をのけて悪い方を選ぶ、私の機の手許を考へてお出でる間に五劫、それから兆載不可思議永劫といふのはどういふ事か、萬善萬行恒沙の功德、墮ちる機を選び取つた、それを受け取るもてを拵へた間に兆載永劫。墮ちる機を受取つて下さる勅命が、まかせよ、うまい工合になつて居る。何をまかせせる、往生は彌陀にまかせよ、罪業は彌陀にまかせよ、墮ちん心配と參るの世話は此の彌陀が受持つ、私はどうしませう、放つて置け、俺が受持つ、たゞかいな、たゞでよい、餘り易いがよからうか、と行け。生れつ

いたる生地のみ、ありべが、りの此の機のみ、そつちや向かんと置け、これは解つて呉れよ。私はどうしませう、どうする事も要らん、それからさきは、此の彌陀が護つて離れはせんぞ、墮ちたら此の彌陀も共に焰の中に行くで、どうする事も要らぬ、受持つ彌陀を當にせよ、受持つ彌陀を力にせよ、外に何にも要らぬ、われをたのめ。

三 ハ、ア、こんな機受持つ、ハ、ア信心貫ふ所を受持つのは話が違ふ、墮ちる機を引き受けよ、參れん機を受持つ、今迄は、疑ひ晴れた方、夜明けした安心した方の機を受持つて貰ふと思つたが、それと話が違ふ。ハーン、うまいぞくと行けよ。こんな易い事はございませぬ。

愈となつたら疑ひ晴れて信じたと思ふた思ひも、大丈夫と思ふた思ひも、間違ひないと思ふた思ひも、サアとなつたら何にもならん、どうも此の心が承知せん、つかまへ所が無い、このまゝぢやらうか、頂けたらどうかなるぢやらうか、

信心貫
ふんしん
るん受
持つ

はつき
りせん
つある

こゝは内證ぢや、表向きは、信じた夜明けした彌陀たのんたを出さないとはづかしい、常終參つて居つてどうも變なものだともいはれん。内證で、サアとなつたら何にも無いがよからうか、こんなものぢやらうか、凡夫ぢやぞ負けて貰はふか、ナンマンダブツ、クシャ〜となつて居るだらう。はつきりせん所が一つあるだらう。其奴が邪魔になつて困る、その邪魔になつた所で六字を聞け。宿善開發の機が六字を聞く。愈となつたら困つた〜、後生となつたら成程と此の機一つがきいては呉れぬ、萬劫億劫にも取返しつかぬ後生と思や思ふ程、助けて貰ふともいはず、大丈夫ともいはん、どうも困りました。そこで困るなよ、そこを受持つ親があるぞといふ事を聞くのぢや。愈となつたらどうする事もいらぬ、お淨土へ參る事と地獄に落ちん事は俺にまかせて置け、行ける行けん世話は俺が引受ける、たゞか、たゞ、信心は、そんなものは要らん、たゞ受持つのではない、受持ちやうは、我よく汝を護らん、萬が一つも俺が受持つて墮ちたら、そなた一人

は墮としはせん、ともに焰の中までも正覺の命かけても護つて離れはせん、そこでそなたの手許ではどうする事もいらぬ、そなたの心の安心、落着きは受持つ親を當にせよ、親と一緒に來る氣になるばつかりで何にも要らん。

無條件
と條件

四 能歸の受け手前は、南無といふは衆生が阿彌陀如來に向ひ奉りて雜行すて後生助けたまへとたのむ機の方なり、墮ちる機がお助けにあふて墮ちん機に轉じ變つた事を南無、墮ちる機お助けは御淨土へ持つて行くのと違ふ、雜行すて、後生たすけたまへと、受持つて貰ふ、引受手に安心する、引受手に安心するなり渡すなり一念同時、そこの意味が解らんとゴチャ〜になつてしまふ。墮ちる機がお助けにあつて今南無の機になるなり、阿彌陀如來は、

ふかくよろこびましまして、その御身より八萬四千のおほきなる光明をはなちて。

ようこそ其の機になつたぞよ、娑婆五十年は護りづめに護つてやる。これが阿

彌陀佛の四つの字の謂れ。そこで墮ちる機がお助けになり、たのむ機が今お助けになつて、親の親切に腹が滿れ、おまけに攝取の光明に護つてもらふ、これでも墮ちられるか、向ふは知れんでも大丈夫、向ふは見えんでも大丈夫と行かんならん。たい無茶苦茶にやつてはいかん。無條件のお助けといふ事は南無、條件つきのお助けは阿彌陀佛、たのまん機は攝取せん、信心の機でなければ攝取出來ませぬ、阿彌陀さんの仕事は二重だ、墮ちる機を受取つて南無の機を起させて置いて、攝取の光明で娑婆五十年護りづめに護つてやる、こゝは二重ぢやぞ、ア、難しい、却々難しいね、此の意味の事がよう腹に這入らんどいふと南無阿彌陀佛の六字の謂れは解らぬ。八十通の御化導は解らぬ。墮ちぬ機を今引受けて貰ふたのが南無、南無の機の心の落着きは引受手に安心する、これが平生業成、さうするとお浄土は見えんでもよい、娑婆の因縁のつきるのを待つばかり。死にたい事はないけれども墮ちる機を彌陀が受持ち、おまけに攝取の光明に護られて居るからは、何時

阿彌陀
さんの
仕事
は二重
だ

でも此の世の命のきれるなり彌陀同體、……大丈夫、ア、エーナといへる。天が地となり地が天となることも私の往生一つは間違ひない、ごをおさへていふか、向ふながめていふのぢや無い、ちやんと今事が片附いて居る、娑婆の縁のきれるなり彌陀同體、大丈夫と返答が出来る。